

説教 『 天にましますわれらの父よ 』
(教会学校との合同礼拝)

小河信一 牧師

マタイ福音書6:9――

「だから、こう祈りなさい。
『天におられるわたしたちの父よ、
御名があが崇められますように。』」

今日は、主イエス・キリストが私たちに教えてくださった「主の祈り」について、その御言葉に耳を傾けましょう。

今朝、皆さん、お祈りして来ましたか？ とても寒かったので、寝ぼけ眼まなこのまま、ベッドの中でお祈りした人もいるかも知れません。

主の祈りの冒頭「天にましますわれらの父よ」というのは、素晴らしいお祈りです。日本語の「天にまします」と「われらの父よ」は、それぞれ7音と7音で並行しています。週「7日」（参照：出エジプト記12:15）というように、7は聖書的に完全数です。実際に唱えてみると、「天にまします われらの父よ」と、快く、呼吸が整います。さあ、心を含めて、神に呼びかけましょう……「天にまします われらの父よ」。

いつも大人の礼拝では、旧約と新約、両方の御言葉を読んでいます。

イザヤ書49:15――

女が自分の乳飲み子を忘れるであろうか。
母親が自分の産んだ子を憐れまないであろうか。
たとえ、女たちが忘れようとも
わたし（主）があなたを忘れることは決してない。

ユダという国が滅ぼされ、人々が外国へ連れて行かれるなど、ちりぢりになり、生活が大変苦しくなった時代のことです。預言者イザヤに神の言葉が降りくだりました。

「女が自分の乳飲み子を忘れるであろうか」という問いかけは、遠い昔のものではありません。それは今の事として、「ここにいるお母さんたち、自分の子どもたちのことを、忘れていませんか。いつも考えていますか」と問われているのではないのでしょうか。「あなたは、幸せな時にも、自分の家や国が困難な目に遭っている時にも、子どものことを覚えていますか」……イザヤが提示していることは、決して特別なことではありません。

それから、イザヤ書には書いてありませんが、「ここにいるお父さんたち、自分の子どもたちのことを、忘れていませんか」と、私たちに問いかけられているのではないのでしょうか。

さらに、「お母さんたち」や「お父さんたち」というだけではなく、「この教会の大人の

人たち、教会学校の子もたちのことを、いつも考えていますか」と尋ねられているのです。

さあ、この神からの問いに、どういうふうに答えたらよいのでしょうか？

イザヤ書49章では、「(女 / 母親)が忘れるであろうか」という問いに対して、「はい」とも「いいえ」とも答えていませんが……。

どういうふうに神にお答えたらよいのか、「主の祈り」によって学ぶことにしましょう。

第一に、私たちが知っていなければならないことは、次のことです。

マタイ福音書6:9――

「だから、こう祈りなさい。」

主イエスは、私たちに「こう祈りなさい」と教えてくださいました。神は、私たちが祈るために、手助けをなさろうとしておられます (G.エーベリンク)。

なぜなら、私たちは誰も、祈りについてよく教えられる必要がありますし、また、常にそのように教えられなければ、しばしば祈りをおろそかにしてしまうからです。

ところで、私たちが「天にまします……」と祈りはじめることには、「教えられたから」という以上に、もっと大きな理由があります。

それは、「主は来てそこに立たれ、『サムエルよ』と呼ばれた」という出来事 (サムエル記上3:10) に示されているように、まず先に、「天にまします」神の側からの呼びかけがあったのです。

だからこそ、私たちは、「父よ」とお答えするのです。

神が私たちを呼んでおられる、だから、私たちは神の方を向くのです (参照：ヨハネ福音書20:16)。極めて自然な関係……呼ばれて答える……の上に、私たちと神との霊的な交わりが成り立っています。自分のことばかり考えているときに、まさに「あっ、しまった！」というときに、「はい」と神の方を振り向く者となりたいものです。その呼ばれて答える証しこそ、「天にましますわれらの父よ」なのです。

神はすでに何度も何度も、私たちの信仰の先達を呼び出してこられました。そこで、幾たびも、人間の側からの応答があり、祈りが捧げられました。そして、時が満ちて、主が「あなたがた」(マタイ6:5,7,8,14,15) と親しく語りかけられる弟子たちが召し集められました。いよいよ、父なる神が、主イエス・キリストを通して、弟子たちはじめ人々に呼びかけ、神の救いの御業を成し遂げる時が到来しました。

「だから、こう祈りなさい」と、私たちの最高の応答であり、簡にして十全な祈りを、主イエスは教えてくださいました。そこに、主イエス・キリストの恵みのうちに、父なる神と十二弟子……神の子もたち……との霊的な交わりが確立されたのです。

第二に、祈りの内容について捉えることにしましょう。

マタイ福音書6:9――

「天におられるわたしたちの父よ」

「天におられる」と「わたしたちの」との二つに分けて考えます。

父なる神と御子キリストは、私たちが天から見下ろしてくださっています（イザヤ書 63:15）。私たちは今、この地上に暮らしていますが、大切なことは、神が天から見ておられることを信じ、天の国を望んで生きるということです。

父なる神と御子キリストは、「主を呼ぶ人すべてに近くいます」神です（詩編145:18）。「天にましますわれらの父よ」とは、言い換えれば、「現に地のここにましますわれらの父よ」ということなのです。朝に夕に、私たちが「父よ」と祈るとき、天の国と地上の生活をつないでくださる神に向かって呼びかけているのです。

主の祈りは、最初から最後まで「わたしたち（の / に / も / を）」で一貫しています。この呼びかけは、「わたしたちの」という語によって、祈るものは、誰も一人で立っているのではないということを思い起こさせています（E.シュヴァイツァー）。

茅ヶ崎香川教会という〈礼拝共同体〉が、「父よ」で始まる祈りにおいて、一つに結び合わされます。そこに、〈一つの家族〉が誕生します。天にまします神は、私たちがまことに〈一つの家族〉であり続けられるように、聖霊の助けを送ってくださっています。先の一週間、多くの時間においては、「わたし」として歩んできた一人ひとりが、今このように、みんな一緒に座っている、その神の恵みが「わたしたちの」の一句に言い表されています。

マタイ福音書6:9――

「天におられるわたしたちの父よ、
御名が崇められますように。」

呼びかけの言葉「父よ」から、最初の願い「御名が崇められますように」へと至りま

す。これは、「あなたの名が、聖なるものとされるように」という意味です。「父なる神の名がいつもきよくあるように」ということが、私たちに、どんな関係があるのかと思われるかもしれません。

神が神である、御名が聖なるものである、というのは、確かに神の側のことと言えるでしょう。しかしながら、ここで、その「御名が聖なるものである」ことを、私たちがそのまま受け入れているか、が重要です。私たちには、それを真実として信じ続けられるか、が問われています。

子どもたち以上に、大人は、それがいかに難しいかを自覚していることでしょう。というのも、この「わたし」というのは、すぐに自分が神になってしまい、「わたしが…わたしが…」と自己中心に陥り、結局、「わたしたちの」交わりを壊してしまうものだからです。

このように、私たちの^{よこしま}邪な思いを省みると、「神が神である」ということを祈る言葉が、主の祈りの初めに置かれている理由が分かります（参照：十戒 第一戒 / 出エジプト

記20:3)。

父なる神は、私たちが子どもとして、常にへりくだっていることができるように、美しい賛歌を与えてくださいました。「わたしが」高ぶらないように、また、「わたしが」大きくなり過ぎないように……

詩編145:1 賛美。ダビデの詩——

わたしの王、神よ、あなたを^{あが}め (=高め)

世々限りなく御名をたたえます。

ルカ福音書1:46-47 マリアの賛歌——

46 そこで、マリアは言った。

47 「わたしの魂は主を^{あが}め (=大きくし)、

わたしの霊は救い主である神を喜びたたえます。」

ダビデやマリアの賛歌に倣って、この「わたし」を低くし、主が高められ、大きくされるように、私たちは常に「御名が崇められますように」と復唱するのです。

さて、この説教の最初の、イザヤ書49:15を下敷きにした問い「ここにいるお母さんたち、自分の子どもたちのことを、忘れていませんか。いつも考えていますか」に帰りましょう。

先に確認した通り、イザヤ書49章では、「(女 / 母親) が忘れるであろうか」に対し、「はい」あるいは「いいえ」という人間の回答は見出されません。つまり、神は、本来^なすべき務め、あるいは、果たすべき責任を全うしているか、と人間を責め立ててはおられません。

主の霊のもとに思いめぐらしていた預言者イザヤが語ったのは、ただ一つのことです。

イザヤ書49:15——

女が自分の乳飲み子を忘れるであろうか。

母親が自分の産んだ子を憐れまないであろうか。

たとえ、女たちが忘れようとも

わたし(主)があなたを忘れることは決してない。

私たちは、父なる神がまず先に呼びかけていることを信じて、「父よ」とお答えします。たとえ、私たちが「父よ」と呼ぶことを忘れても、神は私たちに御言葉を語り、御業を行い続けておられます。

神はいつも、私たちのことを覚えておられます。実際の「お母さん」や「お父さん」よりも、はるかに優って、神は幾重にも、子どものことを覚えている……知っている / 見守っている / 愛している / 見捨てない……ということです。

説教の最後になりますが、どうして「わたし(主)があなた(人)を忘れることは決してない」ということが分かるのでしょうか？

父なる神が、シオンの娘を、私たち・子どもを「忘れることは決してない」ということは、神の御子、イエス・キリストの救いの御業によってあらわされました。その際に、神はとりわけ、私たちの罪を見逃すことなく、私たちの魂の内までご覧になっていたことが示されました。

マルコ福音書14:36 ゲツセマネで祈る――

(イエスは) こう言われた。「アッバ、父よ、あなたは何でもおできになります。この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしが願うことではなく、御心かなに合うことが行われますように。」

※「アッバ」は幼児語で、「父」という意味です。

主の十字架と復活の御業を前にして、主イエス・キリストは、「アッバ、父よ」（「父」が2回繰り返されています）と祈りはじめられました。眠りこけてしまった弟子たちの傍かたわらで、主イエスはひとり、神の前に立たれました。主イエスは最後まで、父なる御心かなに合うように祈り通されました。それは、人を罪と死から救い出すために、ご自身ひとりが苦難をこうむられた、その中でささげられた主イエスの祈りでした。

主イエスは、「アッバ、父よ」と叫びつつ、神の救いの計画と成就の道を歩んでゆかれました。主イエス・キリストの十字架と復活によってはじめて、父なる神と神の子どもたちの永遠の霊的な交わりが確立されたのです。

この永遠の霊的な交わりに支えられていればこそ、「ここにいるあなたがた、自分の子どもたちのことを、忘れていませんか。いつも考えていますか」という問いに、私たちは、「はい、主の助けによって」とお答えすることが許されます。

「父よ」で始まる主の祈りは、「アッバ、父よ」と主イエスが叫ばれたゲツセマネの祈りを、私たちが思い起こすように誘いざないます。主イエスが「アッバ、父よ」と呼びかけられたように、私たちも神に向かって「天にましますわれらの父よ」と呼びかけましょう。

「父よ」との祈りにおいて、茅ヶ崎香川教会が一つとなれますように祈りましょう。（当日の原稿に書き直し・追加をした上で、掲載しました。）